

北杜市立中学校再編整備検討委員会

令和4年度

● これまでの検討内容のまとめ ～中学校再編に係る基本的な方向性～

本委員会においては、北杜市立中学校の適正規模、適正配置について、「適正規模等審議会」の答申に基づいて、中学校の再編整備の在り方について検討を行ってきた。

北杜市の中学校の状況として、現在一つの学年の生徒数は約350名であり、それぞれ8地区の中学校で学んでいる。その半数の中学校が単級であり、他は一部2学級、もしくは3学級という規模で、すべての学校が小規模校となっている。また、学年生徒数が20人以下の学年も一部で見られる。現段階では生徒数の減少は今後さらに進み、およそ10年後には一つの学年の生徒数が約200名前後となり、すべての学校において単級になることが想定されている。

現在、北杜市の中学校においては、生徒数の減少、学年の単級化によって、様々な課題が生じている。生徒の人間関係の固定化により居場所がなくなる、多様な考え方の中で刺激し合い、切磋琢磨する環境が少ない、また、部活動が限定され、望む活動ができないなど、人との交流の中で学び合う機会が失われている状況である。

しかし、小規模、少人数であることの利点も確認されている。義務教育9年間を通して、人間関係を継続し関係を築くことができ、また少人数を活かした指導が受けられる、生徒一人一人が活躍できる機会が設けやすいなどである。

教科指導、生徒指導に関わる教育環境としては、現在の小規模校における個に応じた指導、生徒との密接な関係による指導ができるという反面、教科免許を有する教員が配置されない教科がある、教科担当教員が1名である学校がほとんどであり、複数の教員による組織的な指導ができないという課題も挙げられている。

垂直統合は、現在の学年の規模はそのままに小規模校の利点を残し、小学校と中学校が統合、連携し、学校としての規模を大きくすることにより、小中学校の教員の乗り入れで指導を厚くするとともに、多様な学びを推進していくために、ICTを活用し隣接する学校を含め、他の学校との学び合いの機会設け、課題の解決を目指そうとするものである。しかし、本県の教員採用は、小・中学校別の採用であり、基本的に両方の免許を持っているとは限らず、教員の双方への乗り入れは限定的になってしまう。また、ICTを活用した交流については、学びの多様性にはつながるもの日常的な人間関係の広がりについては改善が難しく、その解決には複数の地域の小学校、中学校の統合の必要性も考えられ、各地域の小学校は残したいという意向に沿わないものになってしまう。

一方、水平統合は、8つの町村が合併し北杜市という一つの市になり、隣の地域にいる同級生と学び合える環境を作り出すことができることから、旧町村の中学校から北杜市の

中学校へと学区を広げ、小規模校による課題を解決していくことを目指すものである。ただし、水平統合による最大の課題は、通学距離、通学時間の問題である。地域によっては、スクールバスの利用が前提となり、生徒や保護者に多くの負担がかからないよう進めていく必要がある。また、旧町村から中学校がなくなり地域の衰退につながる、これまで築いてきた地域との密接なつながりが失われてしまうという課題に対しては、この北杜市で学ぶ子どもたちにとって、より適切であると考えられる教育環境のもとで、北杜市という地域の意識を持ち、中学生という発達段階も踏まえた地域とのつながりを今後築いていくことにより改善を図っていくことが望まれる。

また、小規模校の利点が失われるという課題に対しては、学校のある程度の規模化による加配教員の配置や市単教員が集められることにより、学級を少人数に分けての指導、複数教員によるティームティーチング指導等の充実により、その解決を図っていくことが考えられる。

中学校の小規模化に伴う様々な課題に対して、答申で示された3案「垂直統合」「水平統合」「垂直と水平の組合せ統合」に基づき、そのメリット、デメリット、その解決策等について検討を行ってきた。どの統合がベストかという答えは得られないが、現在、中学生が置かれている状況、課題に対して、どちらの選択が現在の教育環境の改善に資することになるかを総合的に考え、より望ましい方向性ということで意見集約を図った。

8町村が合併し、新しい北杜市という広がりの中で、近くに学び合える仲間がいる状況を前提とし、中学生という発達段階において、実際に関わり合うこと、交流し合うことの重要性などを考えたとき、本委員会においては、生徒の学習環境、生活環境、また、学校の教職員の配置等も含め、総合的に教育環境について検討した結果、「水平統合による一定の学校規模」の学校に統合することが望ましいという方向に意見集約された。

次に「一定の学校規模」の規模については、生徒が複数の小学校から入学し、新たな人間関係を築ける規模、学年の進行に伴うクラス替えにより人間関係を再構築できる規模、生徒会活動や行事等において、自治的な活動、互いに刺激し高めあう活動が推進できる規模、また、教員の配置数に関わり、専門教科教員を全教科に配置し、主要教科については複数の教員が配置できる学校規模、現在、北杜市の多くの学校で行われている部活動が設置できる規模等を勘案し、「学年3・4学級程度が実現できる学校規模」が望ましいという方向に意見集約された。

しかし、水平統合により通学距離が地域によっては長くなることから、そのための対応も適切になされることの必要性も今後重要な議論になることが指摘された。

以上のことから、「一定の学校規模を前提とした水平統合」を基本的な方向性として、今後、各学校及び各地区において説明する機会を設け、児童生徒・保護者の意見や広く市民の声を聞く機会を設け、それを踏まえ、さらに検討委員会で検討し、具体的な方向性を定めていくこととする。